

和歌山で出会った日本

リースーユ
教育学部 交換留学生 中国

日本語を学び始めた頃から、日本に留学することは私の長年の夢であった。教科書に出てくる「団子」はどんな味がするのか、三島由紀夫が小説に描いた金閣寺はどんな風景なのか、日本人が大切にする「おもてなし」とはどんな心なのか、その答えを自分の目で見て、自分の心で感じたいと強く思っていた。日本語を学び、日本の文化を知れば知るほど、その魅力に引き込まれ、心の中で「いつか必ず日本で学び、暮らしたい」という思いは募るばかりであった。両親と相談した後、希望と期待を胸に、私は先生に留学の願書を提出した。そのときの私の心は、憧れ続けた日本の地に足を踏み入れ、自分の夢に一步近づける喜びでいっぱいであった。しかし、現実には理想通りにいかないものだ。その年、突然世界を襲った新型コロナウイルスの影響で、日本への留学は叶わなかった。

大学卒業後、私はすぐに就職せず、日本語の学びをさらに深める道を選んだ。コロナ禍で失われた大学生活の時間を少しでも取り戻したい、そして大学院こそ日本への留学が実現できる場所だという思いがあったからだ。私は浙江師範大学に進学し、ついに念願叶って日本での留学生活を始めることができた。

和歌山での生活は、初日から忘れられない出来事の連続だった。到着したその日、私は友人三人と電車を乗り間違えた。観光列車の終点「貴志」をこれから住む場所の最寄り駅だと勘違いして乗り込んでしまったのだ。電車が終点に着き、窓の外に見知らぬ景色に私たちは顔を見合わせ、ようやく間違いに気がついた。心の中に不安が広がり、「これからどうすればいいのだろう」と途方に暮れた。その時、交換留学生をサポートする WIN コンコードのボランティアの方々が、連絡を受けてすぐに車で迎えに来てくれた。和歌山市駅でその姿を見た瞬間、私は胸が熱くなり、初めて訪れた異国の地で感じたその温かさに、涙がこぼれそうになった。車内でボランティアのおばあさんと話をし、「和歌山はとても静かで美しいところですね。きっと好きになると思います」と言ったとき、心の中で「ここで素敵な日々を過ごしたい」という思いが芽生えた。

和歌山は、本当にその言葉通りのところであった。桜の季節には友人と紀三井寺でお花見をし、風に舞う花びらの美しさに心が洗われた。曇りの日には加太の海を見に行き、帰ろうとしたその時、雲の切れ間から顔を出した夕陽が海を赤く染める光景に、しばし立ち尽くした。雨の日には傘を片手に静かに歩き、家々の庭に咲く花や草木を眺め、草を刈るおじいさんと交わす「こんにちは」の一言に、小さな幸せを感じた。

そしていつしか私は、和歌山の人々が何よりも好きになっていた。初めて一人でバスに乗ったとき、乗り方が分からず戸惑っている私に、親切なおばあさんが声をかけて助けてくれた。「一緒に降りましょう」と笑顔で言ってくれ、その言葉に不安がすっ



と消えた。バスを降りた後「日本に来たばかりで大変でしょう。頑張ってくださいね」と優しく励ましてくれた。その一言は、今も私の心を支えている。



和歌山大学では、日本人の友人や世界各国の留学生と出会い、かけがえのない交流の時間を持つことができた。グループディスカッションでは、自分の日本語が通じるか不安で胸が締め付けられるような思いだったが、日本人のクラスメートたちは優しく励まし、私の言葉に耳を傾けてくれた。母語の違う留学生たちとも日本語で思いを伝え合う中で、「言葉の力」とは何かを改めて実感した。その一方で、うまく伝わらず悔しい思いをすることもあり、「もっと日本語を上達させたい」という気持ちは日に日に強くなった。

気がつけば、留学生活はすでに半分を過ぎた。和歌山での毎日は本当に充実しており、同時にこの生活が終わってしまうことを思うと寂しさも感じる。日本に留学している期間に教科書に見た「団子」の味を知り、憧れの金閣寺を訪れ、居酒屋で見た店員の深いお辞儀に「おもてなし」の心を感じた。また、日本語を学べば学ぶほど、自分がまだ知らないこと、経験していないことの多さに気づいた。言葉とは、知識だけではなく、自分の足で歩き、心で感じ、体験を重ねることで初めて理解できるものだと思う。私はこの留学生活を通して、そう確信するようになった。

在和歌山感受到的日本

李斯羽
中国

还记得刚到日本的第一天，我和两位同伴因不熟悉日本的交通而坐错了车。我们住的地方前一站叫「貴志」，和歌山市站有一列观光列车的终点站也叫「貴志」，疲惫又饥饿的我们误以为那就是目的地。等到达终点，看到陌生的景色，我们才意识到坐错了车。就在我们一筹莫展时，负责照顾交换留学生的 WIN コンコード的志愿者们联系了我们，得知情况后立刻开车赶到和歌山市站来接我们。看到她们出现的那一刻，我心中无比感动。在机场熬过了一夜，一天没吃东西，又拖着沉重的行李辗转奔波，在异国他乡能感受到这样的温暖和关怀，让我有宾至如归的感觉。上车后，我和一位志愿者老奶奶聊起天。我说，虽然一直在学日语、了解日本，但在决定来留学之前没听说过和歌山这个城市。可第一天到来时，就感受到这里安静美丽。我想，我一定会喜欢上这里。

事实也正是如此。我真的很喜欢和歌山这座城市。樱花盛开时我和朋友去纪三井寺赏樱；阴天时坐电车去加太看海，正准备返程时却意外看到了绝美的夕阳；雨天时，我会悠闲地散步，欣赏每户人家院子里的花草，有时遇到正在修剪杂草的老爷爷，还会亲切地跟我打招呼。我更喜欢这里的人们。第一次一个人坐公交时，因为不清楚乘车规则而不知所措，一位老奶奶主动过来帮助我。恰好我们在同一站下车，她对我说：“你下车的时候跟着我就好了。”听到这句话，我心中顿时安心了许多。下车后，她还帮我和司机沟通，替我解决了问题。她问我是不是留学生，当我回答是时，她笑着说：“刚来日本很多事情都要适应，很辛苦吧？要加油哦！”一句陌生人的鼓励，至今仍让我心怀感激。

在和歌山大学，我认识了许多日本同学。每次小组讨论时，我都担心自己的日语不够好会拖后腿，但同学们总是鼓励我勇敢表达，还会好奇地向我请教中国的事情。身边还有许多来自世界各地的可爱留学生，虽然我们母语不同，但能用日语彼此交流、相互理解，这让我觉得语言的力量无比奇妙。当然，也有表达时无法被对方完全理解的时候，这时我就更加坚定：“一定要继续努力提高自己的日语水平！”

不知不觉，交换留学的生活已经过去了一半。这几个月，我过得既充实又幸福，也开始感到不舍。课本上的「团子」我终于亲口品尝到了，去京都旅行时也在金阁寺前拍了合影，和朋友在居酒屋用餐后看到店员深深鞠躬，也逐渐体会到日本人所说的「おもてなし」所蕴含的情感。越学习日语，我越觉得自己所学甚少。语言，不仅是知识，更是需要用心去体验、去感悟的东西。